

VU2RBI Bharathiさんの国インド 雑観

東條 純一 JH3AEF



朝霧の中、荘厳な光を放つタージマハル

()
日程が充分とれず、かなり端折った旅になることは充分覚悟のうえの上であった。しかも悪いことに関空発着のインド航空が突然便を中止してしまった。西向きに飛ぶのに成田まわり 早朝に伊丹に駆けつけ、西向きの機上でようやく落ち着き眼下に映ったのが堺の仁徳陵と臨海工業地帯。一体今朝からのあのあわただしい6時間は何だったんだろう

その後もずっと眼下を眺め続けた。昼間飛行ではそうするのが私のスタイル。決して通路側や翼上の席には座らないのだ。少々トイレに不便しても物の数ではない。座席の前には小さい球形のジャイロを吊るし、ポケットにある航路地図を何時でも眺められるように用意するのも儀式の一つ。おつむは全く機長気取りなのだから可愛いものだ。

昼の機中から眼帯や首枕などして眠れば到着後入眠不良になるのは目に見えているのと思うとしばしばである。

今回の飛行で何となく感激したのは、搭乗機の航路が自分のイメージどうだということだ。高い運賃を払って機の航路のことなど気にする私は余程の苦勞性というものが、EUやWに行くのに毎度のことながらオイオイと言いたくなるほど北上するナビゲーションが、解ってはいるもののどうもシックリにないのは私だけだろうか。

まことに機嫌よくイメージどう北マラヤの白く輝く峰々を右手に見ながら私のナビゲーションびったりインドはデリー、インディア・ガンディー空港に到着した。

()

VU2RBI Bharathiさん VU2DBP Plasadaさんご夫妻は第一回のA PDXCでお会いしたこともあり、また、同カンファレンスでの「アンダマン島沖地震と大津波の際のアマ無線による非常通信」の講



VU2RBI Bharathi さん

演でもおなじみの局である。また私は今年のXT2からの運用でもコンタクトをしたこともあり、因縁浅からぬ局である。

HOME QTHをとみるとニューデリー、離日前に訪印の日程、ニューデリーでの投宿先のホテル名もいれてメールを送ると「すぐそばだ、時間ができたら連絡を頂戴、ヴェジタリアンだがdinnerを一緒にしましょうよ。」と嬉しい返事が返ってきた。

そこでホテルに到着後ただちに電話した。ロビーで待つこと15分もしないうちにご主人のPlasada氏が運転手付きの車で迎えに来てくれた。やはりこの地でも福島原発事故のニュースは頻りに報じられているようで、盛んに危険は無いのかと察してくれる。ただそんな話題の中で自分は政府のエネルギー関係の仕事にかかわっている、つい最近もVKまで石炭に関する仕事で出かけていた。

私の仕事はエネルギー関連だけど原発じゃないよ等と話しながら、車はもう薄暗くなった街中を走りぬけ、ほんの10分ほどでお宅に到着した。玄関で出迎えてくれたのはRBIのBharathiさん。ご家庭ではサリ姿でなく、くつろいだ普段着といういでたち、ポッチャリした顔つきと一寸低めの背丈は可愛いおばちゃんといった感じである。居間にとうされる。片面にリグが並ぶ棚がありシャック兼居間として使われているようだ。最近activeなのは6m、実に多くのJAsとcontactができています。ただ、あまりにも多くの局がIRCを入れたSASEを送ってくるので困っているとも、VUではIRCを換金出来ないとか、US\$を余分に持っているのなら交換してくれないかと言われたが、旅の初日でもあり、それ程の余裕のあろうはずも無くやんわりとお断りした。VUへSASEを送る際にはgreen stampが良いようだ。ぜひ皆さんに伝えてほしいとも、奥のほうで食器の音がするのが聞こえていたが、音がしていたのは食堂であった。とうされて音の主が若くて愛くるしい女性、お嬢さんのVU3DSMさんであることがわかった。もう一人、兄のVU3DVMさんがおられるのだが、Wへ留学中で当日はお会いできなかった。なんでも正月休暇で数日後には帰国なさるとのことだ。お嬢さんも工学系の大学に在学中で間もなく卒業と話していた。食事は御夫妻とお嬢さん、そして私の4人で食卓をかこむことになった。さぞかし辛い食事だろうなと覚悟はしていたが以外にいけるではないか。皆さんのやり方に倣って同じような食べ方で口に運ぶが、決して目をつぶって呑込むような恐ろしいものではなく一安心。大皿にお米、煮付けた野菜を何種類かのポウルから取り合わせ、これまた沢山のスパイスを好みによってかける。ここで初めて各人の食器の横に清潔な布きんがたたんで置いてあるのに気がついた。彼らは大皿に好みの料理や米を取り分けるのは杓子やスプーンを使う。しかし、自分の皿の上の食材と香辛料をまぜ合わせるところからは指だ。そのような話は何となく聞いてはいたが自分の座る食卓で出会ったのは初めて。異文化の特異性というものを強く感じさせられた一瞬である。テーブルに用意された手拭は必須であることもよく理解でき、食堂の片隅にしゃれた手洗いが設備されていることにも始めて気がついた。椅子に腰掛けテーブルを囲む一見どこにもある食事風景だが、この国にはこの国の食習慣がごくあたりまえに営まれ、ここが異国の地であることを今更ながら強く感じた。

私の食器の横にはちゃんとスプーンとフォークが並べられていて、彼らの気配りが有難かった。それならと、お嬢さんに聞いてみた。大学の食堂などではどうするの？



お嬢さんのVU3DSMさん

ちょっと意地が悪いことを聞いてしまったかな、聞かないほうが良かったかな、しかし、答えは明るくあっさり「スナックも多いし、若者はフォークやスプーンも日常的に使います」と聞いて何となくホッとした。食事がかなり進んだころ、奥のほうから人の気配、ふと目をやると老夫婦だ、Plasada氏のご尊父夫妻で父は95歳と言われたように思う。食事後、リビングにおいでになり、一家総出で賑やかに話がはずんだ。お爺さん曰く日本から来たの、ここからは日本に行くのと、ロンドンに行くのとどっちも10時間、丁度真ん中や、昔は船で大変やっ



お爺さんもご一緒に

た、少しお耳が遠いのか、びっくりするような大きな声、だがはつきり判る英語でかくしゃくとされていた。甘いものがお好きなのか盛んにケーキを食べると奨めていただき恐縮至極。三世代が一つの屋根の下で、実に親しく、ごく自然に、しかもプライベートがしっかり保たれた状態で過ごしておられる。日本もつい半世紀前まではこうであったのだが、日本の現状は、どうもこれとは違った方向に合理化の名の下に進んでしまっているように思える。遅ればせながら、あの頃以降の軌道修正はできないものだろうか。話もつきなかつたが、明日からの旅程もありおいとますることにした。帰路もまた同じ運転手が運転する乗用車にPlasada氏が同乗しホテルまで届けてくれた。

()

VUという国をインドと一言でくくってしまうにはあまりにも広大で、全土をざっと見てまわるだけでも一月ではとうてい無理とか。そんな広大な国だから地方による温度差も半端ではない。インド洋に面する南西部では最低気温が年中20-25度、12-1月の日中は30度を越すのが常らしい。一方、ヒマラヤ山地に近いダージリン地方では夏でも15度前後と涼しく、イギリス統治時代には快適な避暑地としてセレブが集まったとか。で、私がこのたび訪ねたのはデリー、ジャイプール、アグラ。VUの黄金の三角地帯と呼ばれる観光スポットの集まる地域だが、位置的には大国の北端に近い地方である。即ちヒマラヤ山麓に広がる平野部である。愚かなことにVU即暑いのが先入観で出かけたものだから空港を出た瞬間の肌寒さに完全に面食らった。最低気温は5度を下回ることもあるとか。これはまいった、真冬の大阪と変わらないではないか。その上1月は濃霧が出やすい季節とか。もう一寸事前調査をすべきだったかなあ。濃霧といえば、朝食前後にはホテルの庭先の木々がぼんやり霞んで見えるといった具合だ。その向こうから真っ赤な太陽が昇る光景は何ともいえず神秘的ではあるのだが。ただ有難いことに時節的には冬場は乾季。天候は毎日悪くなく、この霧も午前10時を過ぎるころには徐々に解消し、気温も日中は15度まで上がる毎日が続いた。





霧の中朝日が昇るジャイプール・アンベール城

()

神風ドライバーとは日本のタクシードライバーに与えられた専売特許の呼称ではなかった。今回の旅を境にこの考えは改めなければならなかった。それほどにVUの交通事情には厳しいものが見られた。さすが首都の市街地では車も比較的整然と流れてはいるものの、それは一部の主要道路だけ、ひとたびわき道に入ると目を疑いたくなるような車のPILE UP、それが地方都市にいたっては「えっつ、そんなことあり?」といった有様である。イギリス時代に技術がもたらされたのであろう。この国にはTaTa という有名な自動車メーカーがある。近年30万円台の軽自動車を売り出したことで有名だが、この会社は実に多様な車を造っており、乗用車以外にもバスあり、トラックあり、トラクターあり、軽便タクシーや街乗りに使われている三輪の車ありである。

日本車ではスズキが断然多く、トヨタ、ホンダ、ニッサンと続くが、日本車全体とTaTaとが相半ばするような感じであった。何がすごいとって、この三輪、軽タクシーに使われているものはモーターリクシャーと呼ばれている。何でも日本の人力車が語源とか。そう言われれば確かにモーターリクシャーがなまったとしてちっとも疑義はない。大方はモーターも取り付けられているれっきとした軽便タクシーである。



リクシャー即ち人力車

このリクシャーの走りときたら砂糖に群がる蟻のごとく、どこから飛び出してくるか判らないし、平気で大通りを横切ろうとする。



モーターリクシャー、ちゃんとモーターもついています

どこにでも飛び出してくるんです、危ない!



信号待ちでも一寸隙間があれば車の前に頭を突っ込んでくるし、車長と変わらないような細い道路でUターンをする。全く我がもの顔の某弱無人さといつた感じである。また、これを制する人や警官が全くないのもこれまたすごい。

首都、空港近くの高速道路はさすがに立体交差となっていたが、ひとたび郊外に出ると、料金を払った高速道路が一般道と平面で交差するのが当たり前、しばしばひやっとする場面に出くわした。

田園地帯では、高速道路を一般道から乗り入れた車が走り、時には農作物を山積みしたトラクターが行く手を塞ぐこともしばしばであった。高速道路のパーキングエリアといったものは皆無だが、所々に簡易宿舎を兼ねた休憩所がある。残念ながら対向車線側であっても必要とあらばバスまでもが対向車線を逆走して入ってしまうのには開いた口がふさがらなかった。濃霧が原因であろうと思われる激しい衝突車両が放置されている姿には心が痛んだが、さも有りなんである。

高速道路を出るや否や、これまたすごい渋滞に見舞われた。どうも数百メートル前方に交差点があるらしい。あたり先暗くなり、周辺の様子は定かでないが近くに人家は全く見当たらず、ただ前方で交差する車の明かりだけが筋をなし横に連なっている。車窓から脇を覗くと川面と思いきところにいさゝ火らしい灯がいくつかユラユラ動いていた。おそらく漁をしているのであろう。後から来た車が対向車線を次々に前に行く。左の道路わきには軽自動車路肩ぎりぎりぎりせり出してくる。そんなところに出てきたら川に転落するよ、

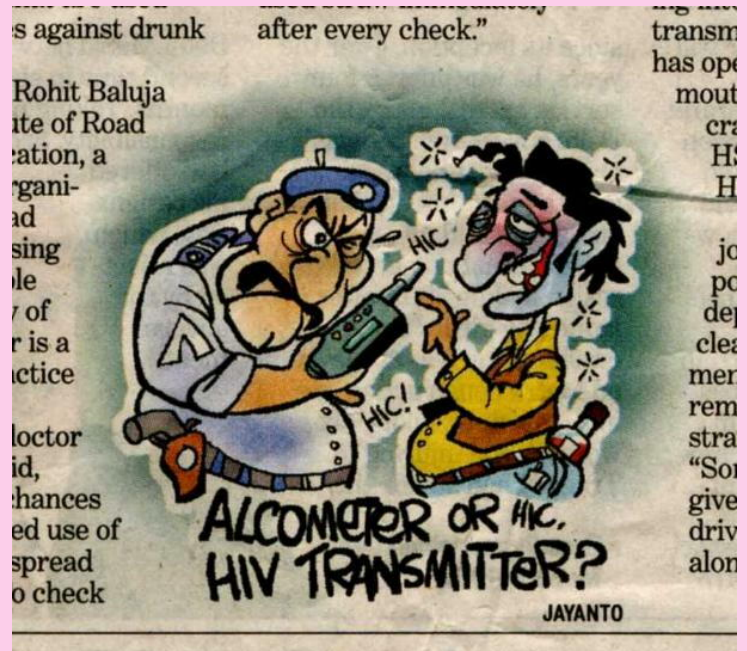
やっど後ろからパトカーが赤色灯を点滅しながらやってきた??? やっど、と思いきや、あれは高官の車、この国ではお役人は赤色灯をつけて走るらしい。とっとと先に行ってしまった。もう何十分渋滞の中に留まっているのだらう

ほうほうの体でジャイプールの街中にこぎつけたものの、運転手さん、そんなに飛ばしてくれなくてもいいよ。大晦日で大混雑の人々が車道にまであふれ出ている路を神風宜しくすっ飛ばしてホテルにたどりついた。あー、運転手さんご苦労さん。明日はお正月です。事故が無くてめでたしめでたし。

()

朝のお努め。ロダンの考える人よろしく、ただじっと座っているのも手持ち無沙汰。扉から差し入れられた新聞を手にしてお努めに入った。新聞名はhindustan timesとなっている。数日前から日本の野田首相も訪印していたはずだが、それらしい記事は見当たらない。仕事から目についたのがdisease fear (病気の心配)と題したこの記事であった。昨日からの交通事情からすると、この国には交通警察などいないのかと思いきや、ちょっと意外な記事である。

中見出しには「もし警官に止められたら息をはく前に確かめよ」となっていて、以下に続いていた。d変調で車を家路に走らせる時は気をつけないといけないう。私は検問に立っている交通警察官のことを言っているのじゃないですよ。実はもっと重大な問題が有るのです。警官がこれ吹いて下さいといつて差し出すあのアルコールアナライザーやアルコールメーター、そう唇にくわえてフツツとやるあの吹き口のあるやつのことです。この吹き口が新しいものかどうかをしっかりと確認しないと駄目ですよ。もしそれが毎回取



新聞のカットから、さてJAでは?

り替えられていなければ、肝炎やエイズまでもの感染の恐れがあるのです。

デリー警察に問い合わせたところ、飲酒運転検問に出ている警察官はアルコール検知器の吹き口の交換は面倒がらずにきっちりやっています」との回答で、一回の飲酒運転検問につき200ヶのディスプレイの吹き口を持って出るとのことである。

しかし、交通安全に関する非営利組織の交通運輸教育機構のR.B.氏は、飲酒検問に使うアルコールメーターのディスプレイのプラスチックの吹き口の再利用は当地では当たり前のことになっていると言っている。

一方、インド医療広報機構の責任者(医師)は問題の吹き口を取り替えないまま使い続けることは、感染性疾患の蔓延を助長することになる。このようなことが原因で発生する病気の蔓延を防止しようとするのなら、警察官はディスプレイの吹き口を検査する人ごとに毎回新しいものに必ず取り替えることを直ちに励行すべきだと述べている。

また、N.L.病院のH.S.H.博士も以下のように話している。万が一アルコールメーターの吹き口が肝炎やエイズに感染している人の皮膚や粘膜に接触したり、息を吐きかけたりした状態で、そのまま使い続けられると、次の人の口中に傷があったり、口内炎が出来ていたり、唇にひび割れがあるようなケースでは容易に感染をおこしてしまい危険ですと。

しかし、警察交通課のS.G.報道官は当署では現場に出ている警察官には従来より使用後の吹き口は直ちに抜き取り破棄交換するよう厳重に周知を図ってきたと述べている。いつの日か、我々は酔っ払い運転手にはこの吹き口をお守りとして差し上げることになるかもとも!!!

Osaka International House Radio Club

大阪国際交流センター・ラジオクラブ

J13ZAG